

## 幼稚園児の昼食にみる箸使用の発達過程

岩田 浩子・松永 洋枝\*・溝口 智子\*・森下 靖子\*

### Developmental Process in Use of Chopsticks Observed in Kindergartners at Lunchtime

Hiroko IWATA, Hiroe MATSUNAGA\*, Tomoko MIZOGUCHI\* and Yasuko MORISHITA\*

#### Abstract

In order to clarify how children use chopsticks at lunchtime, a total of 145 children were observed in kindergarten. Quite a few younger children brought a spoon and/or fork from home, and the number of those bringing chopsticks from home for lunch increased with age. In the upper class, most of the children brought chopsticks for their lunch. The kindergartners seemed to be encouraged by their mothers to use chopsticks at lunch.

In the upper age class, almost all the children (24 or 96.0%) used their chopsticks to eat lunch, and no less than half (11 or 50.0%) in the lower age class used their chopsticks. It seemed that the children grew accustomed to and made great progress in their chopstick use at kindergarten age.

Although the older children used chopsticks frequently, they could not use them skillfully. Chopstick manipulation seems very difficult, so children should not only become accustomed to them, but also practice much more with them in childhood.

#### 緒 言

世界各地の食文化が流れ込む中で、わが国でもスプーンやフォークをかなり使うようになってきているが、箸を使って食べるという伝統的食文化は今なお健在と見ることができる。

しかし、箸を使って食べるということはそれほどたやすいことではない。2本の箸を片手で持ち、食べ物を挟んだり、つまみ上げたり、すくい上げたり、切り分けたりするためには、手指によって箸の動きを上手くコントロールする必要があり、片手で2本の箸をそれぞれ独立に動かさねばならない操作の難しさは並大抵のものではない。このような技能の習得について坂田<sup>1)</sup>は女子大学生でも機能性の高い伝統的な箸の持ち方(向井他<sup>2)</sup>)ができるものは半数に満たないが、そのような技能を習得できたものは家庭で両親から繰り返し箸の持ち方を教育されたものだったと報告している。一方、山下<sup>3)</sup>は、ふつうの子どもでは3歳になると箸を持ちはじめ、はやい子どもでは2歳で持つものもいると報告している。では、最近の子どもはいつ頃どのようにして箸を持ち始めるのであろうか。子どもを取り巻く環境や状況の様々な変化の中で、子どもの発達にも様々な変化があることが考えられる。そこで、本研究では、山下<sup>3)</sup>の報

\* 本学家政学部家政学科平成9年度卒業生

告によれば箸を持ち始める時期に該当すると考えられる幼稚園児について観察を行い、子どもが箸を使い始める時期の発達過程について検討を行った。

## 対象と方法

名古屋女子大学付属幼稚園の園児を対象とし、園児の昼食の様子を観察した。付属幼稚園の昼食は、「給食の日」として大学の食堂で調理したものを配膳する日と、家庭から弁当を持ってくる「弁当の日」があるので、給食の日と弁当の日の両方について観察を行った。

表1は対象児の数を給食と弁当に分けて性・年齢別に分けて示したものである。この表で「年少」は入園時の3歳児グループをあらわすものであり、観察時点では大多数が暦年齢で4歳に達していた年齢群である。同様に、「年中」は4歳児(観察時点で大多数が5歳)の年齢群、「年長」は5歳児グループ(観察時は大多数が6歳)の年齢群をあらわしている。

表1 昼食の形態と性・年齢別にみた対象児の数

昼食の形態	年齢群	男児	女児	合計
給食	年少	11	11	22
	年中	13	15	28
	年長	11	14	25
弁当	年少	8	12	20
	年中	12	13	25
	年長	12	13	25

対象児の延べ人数は145人であるが、このうち箸の使い方を観察できたのは85人である。

観察は1997年2月3日(月)から6日(木)までの4日間で行った。このうちの3日間は給食の日であり、弁当の日は2月5日(水)の1日だけである。観察方法は給食の日も弁当の日も同様に、3人でチームを作って1名が食事をしている園児の様子を見て筆記記録をとり、もう1名がビデオカメラで園児の手元に着目して食食用具と手の動きを記録し、他の1名が箸を使っている園児を対象に35mmカメラで箸の持ち方の写真撮影を行った。

分析は、まず、観察によって得られた筆記記録とビデオ映像から、幼稚園での昼食のために持ってきた食食用具と昼食で実際に使った食食用具を一人一人の園児について調べ、幼稚園児の食食用具の使用実態と年齢による差異を明らかにすることを試みた。次に、箸の持ち方に關しては35mmカメラによる写真を資料に用いた。なお、以上の資料の統計的分析には統計解析ソフトHALBAUX(WINDOWS版)を用いた。

## 結果および考察

### 1. 幼稚園児の食食用具

#### 1) 昼食のために持ってきたもの

表2は幼稚園での昼食のために家庭から持ってきた食食用具を給食の場合と弁当の場合とに分けて示したものである。

幼稚園児の食食用具には、箸、スプーン、フォーク、の3つがあるが、この3つを1点ずつケースに入れたものが市販されており、それを表2では「3点セット」と呼んでいる。この3点セットを持ってくる園児の割合は弁当よりも給食の場合の方が高い。これは親が食べ物の内容までよく分かっている弁当とは異なって、給食の場合、献立は各家庭に知らされているとはいっても、食品の種類や調理の仕方までは分からないので、給食で何が出て食べられるように、親が子どもにこの3点セットを持たせるためと考えられる。

一方、表2には弁当の場合に食食用具を持たずに登園する子どもが少数ながらいることが示

表2 昼食のために持ってきた食器用具の分布：人数（％）

数	用具	給食の場合	弁当の場合	合計
0	なし	0 ( 0.0)	4 ( 5.7)	4 ( 2.8)
1	箸	46 ( 61.3)	41 ( 58.6)	87 ( 60.0)
	スプーン	1 ( 1.3)	0 ( 0.0)	1 ( 0.7)
	フォーク	0 ( 0.0)	8 ( 11.4)	8 ( 5.5)
2	箸とスプーン	13 ( 17.3)	4 ( 5.7)	17 ( 11.7)
	箸とフォーク	1 ( 1.3)	3 ( 4.3)	4 ( 2.8)
	スプーンとフォーク	0 ( 0.0)	1 ( 1.4)	1 ( 0.7)
3	3点セット	14 ( 18.7)	9 ( 12.9)	23 ( 15.9)
合計		75 (100.0)	70 (100.0)	145 (100.0)

給食と弁当とでは分布の比率に有意差あり (p\*\* < 0.01)

されている。これは弁当の場合、食器用具を必要としない弁当、たとえばサンドイッチやおむすびのように手でつまんで食べる弁当や、俗に「ハリネズミ弁当」とも呼ばれる一口大に調理した食べ物ひとつひとつに楊枝がさしてあって、楊枝だけで食べられる弁当を親が子ども用に作っているためと考えられる。

給食と弁当を合わせた全体をみると、昼食のために箸だけを持ってくるものの比率がかなり高い点が注目される(87人, 60.0%)。これは幼稚園児の親はかなり積極的に子どもに箸を使わせようとしていることを示していると考えられる。

昼食のために持ってきた食器用具を年齢別に示したものが図1である。この図では食器用具を「箸」と「他(箸以外の用具)」に2分割し、「箸だけ」、「箸と他1点」、「箸と他2点」、「他だけ2点」、「他だけ1点」、および「(箸も他も)なし」、のように分けて示している。

この図によれば箸だけを持ってくるものの割合は給食の方が弁当の場合よりも全体的に高いが、どちらの場合も年齢が増すにつれてその比率は高まり、年長では箸だけを持ってくるものは給食では22人(88.0%)、弁当の場合でも19人(76%)に達している。また給食の場合、年長児ではスプーンやフォークだけを持ってくるものはなく、箸だけか、箸と他の食器用具1点が2点を持ってきていることが図1の上段に示されている。このことは、親は子どもが就学前の年長組の頃には箸を主要な食器用具とみなし、それを必ず持たせるようにしていることを示すものであろう。

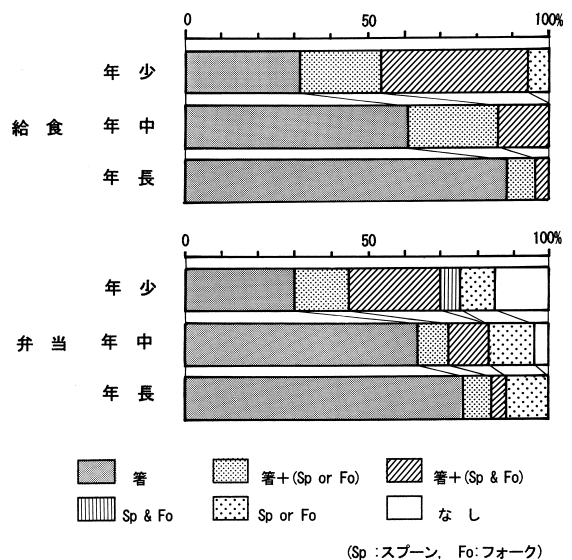


図1 昼食のために持ってきた食器用具の年齢別分布  
年齢間の有意差：給食の場合(上段)あり (p\*\* < 0.01)  
弁当の場合(下段)なし (p=0.1035)

表3 昼食のときに使った食事用具の分布：人数（％）

数	用具	給食の場合	弁当の場合	合計
0	なし	0 ( 0.0)	8 ( 11.4)	8 ( 5.5)
1	箸	55 ( 73.3)	46 ( 65.7)	101 ( 69.7)
	スプーン	5 ( 6.7)	1 ( 1.4)	6 ( 4.1)
	フォーク	1 ( 1.3)	14 ( 20.0)	15 ( 10.3)
2	箸とスプーン	9 ( 12.0)	0 ( 0.0)	9 ( 6.2)
	箸とフォーク	1 ( 1.3)	0 ( 0.0)	1 ( 0.7)
	スプーンとフォーク	2 ( 2.7)	1 ( 1.4)	3 ( 2.1)
3	3点セット	2 ( 2.7)	0 ( 0.0)	2 ( 1.4)
合計		75 (100.0)	70 (100.0)	145 (100.0)

給食と弁当とは分布の比率に有意差あり( $p^{**}<0.01$ )

## 2) 昼食のときに使ったもの

表3は幼稚園の昼食で子どもたちが実際に使った食事用具を給食の場合と弁当の場合とに分けて示したものである。

幼稚園の昼食で子どもたちは家庭から持ってきた食事用具の中から使いたいものを選んで使うわけであり、持ってきた用具より使った用具は少なくなる可能性が高い。

最初に、食事用具を使うか使わないかについて、表2と表3で給食と弁当の場合を比較すると、給食の場合は全員が何らかの食事用具を持ってきていて、何も持ってこなかったものはいなかった。しかし、弁当の場合は食事用具を何も持ってこなかったものが4人(5.7%)あった。そして、実際の昼食時に何も使わなかったものは給食の場合には0人だったが、弁当の場合には何も使わなかったものは食事用具を何も持ってこなかった4人を合わせて8人(11.4%)に増えていた。このことは、幼稚園児では食べやすさを考えて作った弁当の場合には箸もスプーンもフォークも使わずに食べることがあるが、米飯とおかずを入れた弁当箱とスープを入れたカップが供されるような給食では食事用具を何も使わずに食事をする子どもはいなくなり、何らかの用具を使って食べるという食文化がこの時期に身に付くことを示していると考えられる。

また、表2と表3の給食と弁当の全体を通してみた場合、持ってきた食事用具の数よりも実際に使われた用具の数のほうが少ないことをはっきり示しているのが「箸」と「3点セット」である。「箸」に関しては、表2では箸だけを持ってきたものは87人(60%)であるが、表3で箸だけを使ったものは101人(69.7%)に上り、箸だけを持ってきた87人を除く14人は箸以外のものを持ってきたがそれを使わなかったことを示している。また、「3点セット」を持ってきたものは23人(15.9%)あったにもかかわらず、実際に3点全部を使ったものは2人(1.4%)にとどまり、21人は1点か2点を使わなかったことが分かる。このことは、箸のように使うことができさえすれば一つだけでいくつもの役割のはたせる食事用具の便利さを子どもたちは毎日の経験の中で感じ取りながら、箸の使用に慣れていく過程を示していると考えられる。

箸使用の慣れに関しては、実際に昼食時に使った食事用具を年齢別に示した図2でみることができる。弁当の場合は弁当の内容が一人一人異なるため、使われる食事用具の年齢差を検討することは難しいが、給食に関しては日によって変わる献立もそれぞれの日時では全年齢児に共通しているため年齢比較が可能である。そこで、図2の給食の場合に着目すると、箸だけを使用した子どもは年少では11人(50.0%)にとどまっております、この段階ではスプーンやフォーク

を好んで使う傾向が残っていることが分かる。これは年少ではまだ箸が上手く使えないためにこのような結果になっていると考えられる。しかし、年長児では24人(96.0%)の子どもが箸だけを使って食事をしており、残る1人(4.0%)も箸と他の1点(この年長児の場合はスプーン)で食事をしている。このことは年長児では箸の使用にはかなり慣れていること、そして他の食事用具があればそれも活用するという発達段階に達していることを示すものであろう。

## 2. 箸の使い方

### 1) 箸を持つ手と持たない手

箸の使い方に関しては、給食と弁当の両方の場合を含め、実際に箸を使っていた85の事例について観察を行った。表4は箸を持つ方の手の側を年齢別に示したものである。

各年齢群を含めた全体では、箸を右手に持つものが大半を占めており(80人, 94.1%), 左手に持つものは少数だった(5人, 5.9%)。

最初にも書いたように、箸は片方の手にもち、2本の箸で挟む、つまむ、すくい上げる、切り分ける、の

ような様々な動作を行わなければならないため、利き手に持つことが多い。したがって今回の結果で右に持つ事例が多いのは他の研究結果(坂田<sup>1)</sup>)と較べるとやや低い。右利きが圧倒的に多い現状を反映したものであろう。しかし、利き手が左手の場合、左右の手にフォークとナイフを持つ西洋式食事マナーとは異なって、箸は片方の手に持つために箸を左手で持つと目立ち、それゆえ左利きの子どもは右手に持つように矯正される場合が少なくないようである(坂田<sup>1)</sup>)。今回、右手で箸を持っていた子どもの中にどの程度左利きを矯正されたものが含まれているかは明らかでないが、坂田<sup>1)</sup>の結果よりも右手で持つ割合がやや低いということは、左利きを矯正されずに箸を左手で持つ子どもが多く残っていることを示しているとも考えられる。

次に図3は箸を持たない方の手の動作がどのようになっていたかを年齢別に示したものである。年齢間に有意差はなかったが、箸を持たない方の手で弁当箱やスプーンの入ったカップなどを持ったり、そのような食器に手を添えていたりした子どもの割合は年齢の低いものの方が高く、箸を持たない方の手が食器に触れていない事例の割合は年齢の高いものの方が高かった。

日本の食文化では一方の手(右手)に箸を持ち、他方の手(左手)で飯茶碗や汁碗を持って食べ

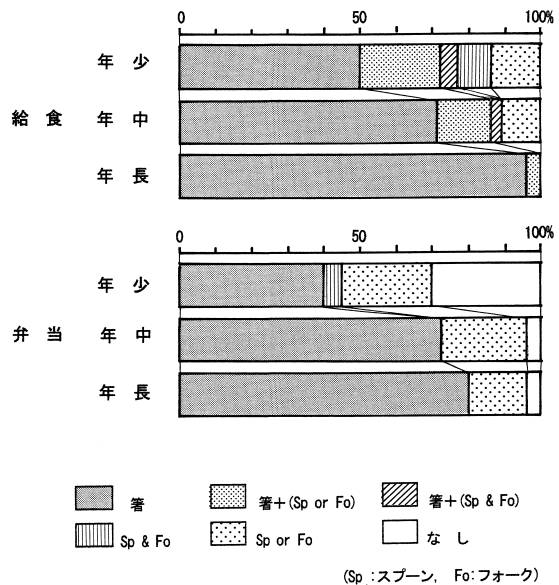


図2 昼食のときに使った食事用具の年齢別分布  
年齢間の有意差：給食の場合(上段)なし(p=0.0501)  
弁当の場合(下段)あり(p\* < 0.05)

表4 箸を持つ手の側の年齢別分布：人数(%)

	右手	左手	合計
年少	5 (100.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
年中	38 (95.0)	2 (5.0)	40 (100.0)
年長	37 (92.5)	3 (7.5)	40 (100.0)
合計	80 (94.1)	5 (5.9)	85 (100.0)

年齢群間の有意差:なし(有意確率p=0.7566)

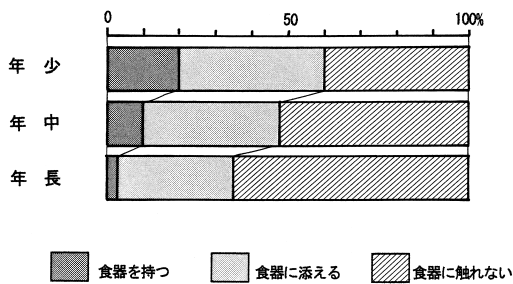


図3 箸を持たない方の手の動作についての年齢別分布  
年齢間の有意差なし ( $p=0.4255$ )

るのが伝統的な食べ方である。この作法は左右の手にそれぞれフォークとナイフを持ち、皿は卓上に置いたまま食べる、という西欧流のマナーとは異なるものである。しかし、今回の結果では、子どもたちは日本の食文化である箸を使いつつも、年齢が上がるほど食器には手を触れずにテーブルの上に置いたまま食べるという西欧流の食べ方が多くなる傾向がみられた。このような傾向があら

われた要因の一つには給食の弁当箱がかなり大きく持ちにくいことが考えられる。そこで、年中や年長の半数以上の子どもたちはテーブルの上に置いたままの弁当箱から食べ物を取り出して口に運ぶなど、かなり器用に箸を使って食事をしていたとみることもできるであろう。

## 2) 箸の持ち方

箸を上手に使うためには、2本の箸を独立に動かし、食べ物を挟む、つまむ、すくう、切り分ける等の作業をしなければならない。そこで、2本の箸の状態を「不分離(2本の箸がくっついた状態)」か、両方の箸が「独立に動いていた」か、についてみたものが表5の左側である。

箸の状態に関しては、年齢間に有意差まではなかったが、年少、年中の2群と年長の間にやや差があり、年長児では2本の箸が独立に動いているものの割合がかなり高くなる傾向がみられた。このことは、年長とそれ以下の年齢群の間に箸を持つという微細運動の発達に関し、発達の節目とでもいうようなものが存在していることを推察させる。

また、表5の右側には箸をその本来の目的にあわせて使うためには不可欠な指の動作である拇指対向性の有無についての年齢別分布を示してある。拇指対向性とは手の親指が他の4指と向かい合って働く動作を指すものであり、この動作が十分にできる機能は人間だけにあると考えられている。親指のはたらきについて山下<sup>3)</sup>は、箸の持ち方の発達段階を示す7つの段階の中で、箸を持ち始める初期の段階にあらわれる「匙を持つと同じような持ち方」や、いわゆる「握り箸」の段階では親指は使われていないが、発達が進んだ段階では、親指は箸を動かす場合にも保持する場合にも2本の箸を支えるために大きな役割を果たすと述べ、拇指対向性の重要性を指摘している。

表5をみると拇指対向性に関しては、年齢間に有意差はなく、どの年齢群でも拇指対向性を有するもの比率は高かった。とくに、年長よりも年少の方が高い傾向にあった。このことは拇指対向性の機能そのものは幼稚園入園前のかかなり早い時期に獲得されていることを示していると考えられる。しかし、その機能が箸を持つという難しい操作でどの程度活用されているかに関してはまだ不明である。

次に、図4は箸を持つために実際にどの指が使われていたかを年齢別に示したものである。

年齢間に有意差はなかったが、とくに「親指、人差し指、中指、薬指」の4指が使われていた事例の占める割合は年齢による差は小さく、年少2人(40.0%)、年中18人(45.0%)、年長は15人(37.5%)だった。しかし、「親指、人差し指、中指」の3指が使われていた事例は年齢とともに増える傾向にあり、年少1人(20.0%)、年中13人(32.5%)、年長18人(45.0%)だった。

伝統的で機能性が高い箸の持ち方として、向井他<sup>2)</sup>は「親指、人差し指、中指」の3指で片方

表5 箸の状態と箸を持つ手の拇指対向性

	両方の箸		拇指対向性		合計
	不分離	独立に動く	なし	あり	
年少	3 (60.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	5 (100.0)	5 (100.0)
年中	24 (60.0)	16 (40.0)	2 (5.0)	38 (95.0)	40 (100.0)
年長	15 (37.5)	25 (62.5)	4 (10.0)	36 (90.0)	40 (100.0)
合計	42 (49.4)	43 (50.6)	6 (7.1)	79 (92.9)	85 (100.0)

何れも年齢間に有意差はない：箸の状態( $p=0.1171$ )，拇指対向性( $p=0.5583$ )

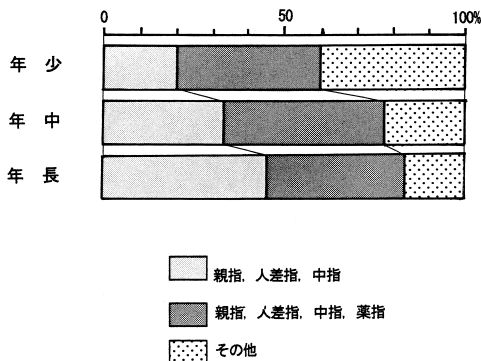


図4 箸を持つために使われている指の年齢別分布  
年齢間の有意差なし( $p=0.6146$ )

今回の観察結果では、「親指，人差指，中指」の3指が使われている事例が年齢とともに増加すること，また，これに薬指を加えた4指が使われていた事例がどの年齢群にも約40%あることが分かった。このことは，幼稚園児の段階で箸を持つことに対して指そのものはかなり使われていることを示すとともに，それが成熟した持ち方に向かう傾向を示していると考えられる。しかし，今回の観察では，箸の操作のためにそれぞれの指が機能を発揮するように使われていたかどうかはよく分からなかった。それを明らかにするためには今後より詳細な課題場を設定し，実験的観察を行うことが必要と考えられる。

## 要 約

箸の使用について，幼児期の発達を明らかにするために本学付属幼稚園の昼食時に観察を行い，145名の園児を対象として食器用具中に占める箸の使用頻度をみた。また，箸を使っていた85例を対象に，箸の持ち方について分析を行い，次の結果を得た：

- (1) 幼稚園児が昼食のために家庭から持参する食器用具は，箸，スプーン，フォークの3種類であった。年少児では3種の中から2つまたは3つを持参する割合が高く，年齢とともに箸だけか箸を含む2つを持参するものの率が高まることが分かった。また，年齢が高まるほど箸の使用頻度は高まり，年長児では大部分が箸だけを使用していた。
- (2) 箸を持つ手は右側が多かったが(80人，94.1%)，左手の使用もあった(5人，5.9%)。
- (3) 年長群では，年少群や年中群とは異なり，2本の箸を独立に動かし，箸としての機能を発揮させているものの割合が高かった。

(4) 箸を持つために使われている指は、「親指，人差指，中指」の3指と，それに薬指を加えた4指が使われている事例の割合は年齢が増すにしたがって高まり，伝統的な箸の持ち方，または，大人の正しい持ち方に近づいて行く傾向がうかがえた。

【謝辞】本研究に着手するにあたり，家政学部家政学科学士の卒業研究に対して付属幼稚園の観察を行うことを許可して下さいました当時の幼稚園長鈴木重夫先生に深く感謝いたします。また，園児の昼食時間中であつたにも関わらず，その観察に快く協力して下さいましたクラス担任の先生方に厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 坂田由紀子：箸の持ち方とその機能性およびその要因について - 女子学生について - ，日本家政学会誌，41・7，637-645（1990）
- 2) 向井由紀子，橋本慶子：箸の使い勝手について - 箸の持ち方 - ，家政学雑誌，29・7，467-473（1978）
- 3) 山下俊郎：運動の発達，改訂幼児心理学，93-95，朝倉書店（1957）